

琉球大学学術リポジトリ

大学生の親の期待が失敗観に及ぼす影響

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2021-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 裕輝, 温山, 陽介, 藤原, 章汰, Nishimoto, Hiroki, Atayama, Yosuke, Fujiwara, Shota メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48268

大学生の親の期待が失敗観に及ぼす影響

西本 裕輝¹, 温山 陽介¹, 藤原 章汰²

The Impact which Expectation of University Student's Parents
Has on Beliefs about Failure

Hiroki NISHIMOTO¹, Yosuke ATAYAMA¹, Shota FUJIWARA²

はじめに

本稿では、大学生が親から受ける期待をどう認知するかが、大学生の失敗に対する価値観に与える影響を明らかにし、大学生の否定的な失敗観を改善する支援の一助とすることを目的とする。

大学生は、新生活や就活など、入学から卒業までのそれぞれの時期によって、様々な課題と不安に直面する。その課題や不安は大学生のメンタルヘルス不調を引き起こす要因となると指摘されている(三宅・岡本, 2015)。ただでさえそうした微妙な時期に、最近ではコロナ禍という特殊な状況におかれることにより、大学生のうつ病や退学・休学は今後増えていくことが懸念される。

そうした中で、大学生を対象としたメンタルヘルス研究は今後ますます重要となってくるだろう。ここでは失敗観をキーワードとしながら、大学生を対象とした調査を通して要因分析を試みたい。

1. 背景と目的

(1) 大学生のうつ傾向

大学生は、アイデンティティの確立、親からの自立といった青年期の課題に直面する時期であり、大学入学に際しての環境変化も大きく、卒業後の職業選択も現実問題として迫ってくる。そうした中で、不適応を起こす学生も多く、欠席、留年、休学、退学などの修学状況への影響も大きい(三宅・岡本, 2015)。このように大学生は、入学後の一人暮らしや周囲の環境の変化、また卒業後の進路の選択やそれに伴う就職活動などの課題

に直面する。その課題は大学生に不安を感じさせ、その課題や不安は大学生のメンタルヘルス不調を引き起こす要因となると考えられる。

三宅ら(2015)は、大学生のメンタルヘルス不調の一つにうつ病を挙げている。大学生のうつ病は近年増加傾向であり、学生生活にも大きな影響を及ぼしている。また、青年期のうつ病は、対人関係の困難や、学業成績の低下などにつながることや、自殺の要因にもなりやすいことも指摘している。このことから、大学生にとってうつ病は学業生活を脅かすものであると考えられる。そのため、大学生のうつはどのように強められていくのかについて調査することは重要であると思われる。

さらに、大谷・桜井(1995)は、大学生を対象に完全主義とうつ状態の関係について検討した。その結果、完全主義の特徴のうち、「ミスに過度に気にすること」という傾向について、この傾向を強く持つとストレスの強弱に関係なく、常にうつ状態に陥りやすくなることを示した。また、羽吹(2006)は失敗や欠点等、自己の不完全性を受容できなくなると精神的健康は悪化するということを指摘している。これらのことから、近年大学生のうつ病が増加している要因の一つは、ミスを過度に気にしてしまう学生が増えていることであると推察することができる。そして、ミスを過度に気にしないようにすることができれば、結果的に大学生のうつ病の減少にも繋がるのが期待できる。そのためには、そもそも大学生がミス、つまり失敗というものをどのように捉えてい

¹ 琉球大学グローバル教育支援機構

² OWNDAYS

るかということに注目することが必要である。

(2) 失敗

私たちは、生活の中で様々な成功や失敗を経験する。失敗について池田・三沢(2012)は、失敗とは、「一人もしくは複数の人間がある行為を行うものの、それが当初の目的達成につながらない、あるいは望ましくない結果が生じること」と定義した。失敗という言葉自体からは、ネガティブな印象を受けることが多いが、失敗経験が必ずしも悪いものとは限らない。心理学においても、特に認知主義の立場では、失敗は避けるべきものではなく、学習を促進するための有益な情報を提供するもの、といった肯定的なとらえ方がなされている(西村・瀬尾・植阪・エマニュエル・田中・市川, 2017)。過去の失敗事例を学ぶことは、二の轍を踏まないために、きわめて重要である(次, 2002)という指摘もある。このように失敗経験には、後の成功に繋がる学びを得ることができるという意味でポジティブな側面もある。

失敗経験を肯定的にとらえる場面の一つの例として学業場面がある。「失敗を恐れずに挑戦しよう」、「教室は間違える所だ」など、教育場面では、失敗経験を肯定的にとらえ、成功に結びつけることが推奨されている(西村, 2017)。学習者自身が自ら学習過程を振り返り、失敗(あるいは成功)の原因を明確に認識することが、知識や理論の再構成に結びつき、学習を促進するという考えもある(西村ら, 2017)。このように学業場面では、失敗を経験し、そこから何らかの教訓を得ることで学習者の学びがより深まると考えられている。寺尾・市川・楠見(1998)が、学業成績の高い生徒の方が、質の高い教訓を引き出していることを示していることから、実際に失敗から教訓を得ることで学習者の学びが促進されることがわかる。

失敗から教訓を得るということは、先に例示した学業場面に限らず、我々の日常生活における様々な失敗経験にあてはまる。しかし、誰もが失敗経験のポジティブな効果を得られるとは限らない。池田ら(2012)は、失敗に直面したときの効果を大きく左右するものとして、失敗に直面する前にそもそも失敗をどのように考えているかが影響すると述べている。例えば、失敗経験の意義を

強く認識している者は、困難な課題に直面しても悲観的に考えず、そこから何らかの教訓を得る。それに対して、失敗を過剰にネガティブなものとしてとらえていれば、たとえそれが大きな成長を遂げる可能性を持つ貴重な経験であっても、十分に振り返らずに落ち込んでしまうこともある(池田, 2012)。つまり、失敗することは自分を成長させてくれる、または後の成功に繋がるものであるといったように、失敗を肯定的にとらえている者は、その失敗を振り返ることで後に活かす教訓を得ることができる。しかし、その逆に失敗することは恥ずべきことだ、または失敗してしまうことで自分は何らかの不利益を被ってしまうといったように、失敗を否定的にとらえている者は、失敗経験を振り返ることによる教訓を十分に得ることができなくなってしまうということである。

そもそも失敗経験には恥や恐れといったネガティブな価値が付随する(三沢・池田・西元・阿部, 2006)。失敗を経験することで、何らかの利益を得ることができるとはいえ、実際に失敗に直面することを多くの人は避けたいと考えるだろう。そしてその失敗に対する否定的な考え方は、失敗から教訓を得ることを妨げてしまうと指摘する研究者もいる。植阪(2010)は、カウンセリングを実施し、「自分の失敗は恥ずかしくて見たくない」という信念が自分の失敗を振り返るというメタ認知的活動を阻害することを明らかにした。その一方で、「失敗を分析することは、自分によって有益である」という発想へと変化した者は、自発的に振り返りを行うようになったことも示している。

過去の失敗を十分に活かし、以後に無駄な失敗を繰り返さないことは重要であるものの、同時に失敗経験には恥や恐れといったネガティブな側面もある。こうしたネガティブな価値が払拭されなければ、失敗を教訓としつつ学習が進展することは困難である。失敗が不可避であることを考えると、失敗に対する肯定的あるいは前向きな価値観を持つことが重要であり、失敗に対する価値観は、個人の学習と成長を左右する重要な心理的変数であると言える(池田ら, 2012)。そして池田ら(2012)は、この失敗に対するとらえ方や価値観のことを「失敗観 (beliefs about failure)」と

呼んだ。

(3) 失敗観

池田ら (2012) によると、「失敗観」は以下の四つの価値観により構成されている。

- ① 失敗のネガティブ感情価：失敗をネガティブな感情を喚起させるものとする価値観。
- ② 失敗の学習可能性：失敗を学習の機会と考える価値観。
- ③ 失敗の回避欲求：失敗を可能な限り避けたいと考える価値観。
- ④ 失敗の発生可能性：失敗が避けられず、不可避に発生するものとする価値観。

第一に「失敗のネガティブ感情価」は、失敗という結果とネガティブな感情が随伴すると考える価値観を意味しており、失敗に対して否定的な価値観である。この価値観は、特性不安と強い正の相関があることや、自尊感情及び自己効力感とは負の相関があることがわかっている。池田ら (2012) は、この価値観が強いほど、失敗を過度に気にし、そのために課題に挑戦したり、成功を求めたりする欲求が弱いことを指摘している。

第二に「失敗の学習可能性」は、失敗を肯定的にとらえる価値観であり、先述した失敗から教訓を得るために必要な考え方である。この価値観は、自己効力感と中程度の正の相関があることがわかっている。

第三に「失敗の回避欲求」は1つ目の価値観と同じく失敗に対して否定的な価値観とみることができ、特性不安や完全主義の“完全でありたい欲求”、“失敗を過度に気にする傾向”、“行動に疑いを持つ傾向”と正の相関があることが示されている。池田ら (2012) は、この失敗を避けようとする価値観が強い者は、特性的な不安傾向も強いいため、成功や失敗が伴う機会を避けることで自己防衛を図っていることがうかがえると述べている。

最後に「失敗の発生可能性」は、失敗は避けられず誰にでも起りうるものとする現実的な価値観を表しており、他の三つと違い失敗に対して肯定的でも否定的でもない価値観であると見ることができる。

失敗から教訓を得るためには失敗に対して肯定的な価値観が必要であり、逆に失敗を否定的にと

らえる価値観は失敗からの教訓を得ることを阻害する。先の池田ら (2012) の研究により見出された四つの失敗に対する価値観で考えると、失敗に肯定的な「失敗の学習可能性」は、失敗からの教訓を得るために必要な価値観であり、失敗に否定的な「失敗のネガティブ感情価」及び「失敗の回避欲求」は、失敗から教訓を得ることを妨げる価値観であると見ることができる。失敗に対して肯定的でも否定的でもない価値観である「失敗の発生可能性」は失敗から教訓を得ることに関しては直接的な関係性はないと考えられる。

池田ら (2012) の研究の四つの失敗に対する価値観のうち、失敗に対して否定的なものである「失敗のネガティブ感情価」及び「失敗の回避欲求」は以下の二つの点から見て、我々にとって負の効果をもたらす可能性がある。第一に、何度も述べているように、失敗から教訓を得ることができなくなるという点である。我々は失敗を振り返り何らかの教訓を得ることで学習の促進や後の成功に繋げることができる。しかし、この失敗に対して否定的な価値観を持っていることによってその得られるはずの教訓を十分に得ることができなくなってしまう。この点により失敗に対する否定的な価値観は我々に不利益を与える。

そしてもう一つは、精神的に不健康な状態に繋がる可能性を持っているという点である。池田ら (2012) の研究により、「失敗のネガティブ感情価」及び「失敗の回避欲求」という失敗に対する否定的な価値観は、自尊感情と負の相関を持つことや、特性不安や完全主義など我々の精神的健康を脅かす可能性を秘めているものと関連することが示されている。

以上のことより、失敗に対する否定的な価値観である「失敗のネガティブ感情価」及び「失敗の回避欲求」は失敗から後の成功のための教訓を得ることを阻害するだけでなく、自尊感情を低め、特性不安を高めるといった精神的に不健康に繋がる可能性もあるという点から見て、我々に不利益をもたらすものであると考えることができる。

すなわち、この失敗に対する否定的な価値観を改善することで、自身の失敗を恐れず振り返って教訓を得ることができるだけでなく、失敗に曝されることにより精神的に不健康になることを阻

止ることができると考えられる。そのためにも、失敗をどのようにとらえ考えているかという価値観である失敗観について調査し、ネガティブな失敗観についての知見を得ることに意味があるだろう。

失敗に対する価値観についての先行研究に関して、失敗観とその他の心理的変数との関連などはいくつか研究がされているが、失敗観がどのように形成されるのかということに触れた研究は少ない。西村ら(2017)では、失敗観の形成プロセスを解明することが失敗観を詳細に研究していく上で必要であるということが述べられている。形成プロセスに関連する要因としては、周囲の他者の影響が挙げられる(西村ら, 2017)。このことより、失敗観は周囲の他者による何らかの影響を受け形成されることができると考えることができる。よって失敗観の形成に与える他者の影響を考慮することは、否定的な失敗観を改善することに繋がるという意味で意義があるだろう。

(4) 親の期待に対する子どもの認知と反応様式

高木・馬場・徳永(1997)は、人が価値観を形成する際に影響を及ぼす者には親や教師、友人など様々な人物が考えられることから、大学生を対象に価値観形成において最も影響を与えるのは誰かを明らかにするための調査を実施した。その結果、男女ともに自分の価値観形成に最も影響を与えたと考える人物として親を挙げた者が多かった。また、自身の価値観形成に最も影響を与えたとする人物の価値観と、主観的に類似した価値観を形成する傾向が見られた。つまり、子どもの価値観形成には親の存在が最も強く影響し、その親の価値観と類似した価値観を形成するというのである。よって、失敗に対する価値観である失敗観の形成にも親の存在や親の価値観が影響していると考えることができる。

親の価値観の一つの表れとして、「このようにあってほしい」という子への期待がある(河村, 2003)。親は様々な願望を、期待という形で子どもに抱く。「健やかに育ててほしい」、「勉強を頑張ってよい学校に入ってほしい」、「友達に恵まれてほしい」などが挙げられるだろう。また、教育者としての立場から「このような人間に育てたい」と教育目標を立て、その通りに子どもが成長

することを期待する場合もある(春日・宇都宮, 2011)。そうした親の期待や願いが子どもを取り巻く環境を作り、その環境が子どもの発達に影響を与える(柏木, 1990)。子どもにとって親の期待は、時には励ましとなり、発達を援助する。また時には重圧となり、子どもが非行行動を起こす要因にもなる(春日ら, 2011)。

児童期を過ぎ青年期に入ると子どもは心理的離乳を向かえ、親から精神的に自律しようとし、必然的に親との距離は大きくなり、親からの影響は相対的に少なくなる(柏木, 1974; 佐々木, 1995)。しかし、春日ら(2014)は、高校生以降の青年に対しても親の期待は影響を与え続けると述べている。例えば、河村(2003)の研究では、親の期待を高く認知している高校生は完全主義傾向が強いことや、仲野・桜本(2006)の研究では、大学生のアイデンティティ形成及び自尊感情に親の期待が影響を与えることが示されている。また、養育者、教育者としての親の期待は、青年期の子どもの性格、進路などに影響を与えるという指摘もある(春日ら, 2014)。

以上のように、親の期待は子どもに様々な影響を与える。子どもはその振る舞いに、また、学業やスポーツで結果を残すことを期待されていると考え、それを全身で感じとり、時には推測する(春日ら, 2014)。松本・渡辺(1983)は、人は幼い頃から親から期待を受け、それに応えることで成長していく、また自己実現には自分自身に対する期待とともに他者からの期待が必要であるとし、それらを持ち得ない者は十分な成長を遂げることが不可能であると述べている。

その一方で、親の過度な期待は子どもにとってプレッシャーとなり、負担感が増す要因ともなる。子どもの認知する親の期待が子の能力や意欲に比して高い場合は親の過剰期待となる(松本ら, 1983; 孫, 2010)。また、親の期待するような子ども像を理想の自己ととらえてしまった場合、子どもは自分に完璧であることを自ら課してしまうと考えられる(河村, 2003)。親は自分の期待を意識せずに子どもに接している(尾木, 1996)と言われていることから、親の価値観は意識するしないに関わらず子どもへ向ける期待という形で表出し子どもに伝わる。そして子どもは、親が意

識していなかったとしても自分に向けられている親の期待を感じとる。もしこの時、子どもが感じとった親の期待が自分の実力以上のものであった場合、子どもは親の期待に応えるために、自分に完璧であることを求め、このようにあらねばならないという義務を感じ、その理想像を崩してはいけないと感じるかもしれない。その結果、理想像を崩すことに繋がる失敗を恐れ、回避しようとするだろう。この状態が長い間続けば、「失敗する」ということに対して過剰に敏感になってしまう可能性がある。つまり、失敗観がネガティブになってしまうと考えられる。

以上のことから、親から向けられた期待に対して負担に思いながらも、その期待を裏切らないように、親が自身に描いている理想像を崩さないことを重要視するとき、失敗を恐れ、失敗するようなことは避けるようになる。結果的に失敗に対するとらえ方が過剰に否定的に、つまり失敗観がネガティブになるのではないかと考えられる。

よって本研究では、親の期待を子どもがどのように感じるかが子どもの失敗観、特にネガティブな失敗観にいかなる影響を与えるかについても検討する。

(5) 親の期待と期待に対する反応様式

親の期待が子どもに与える影響の研究においては、期待そのものに良いもの、悪いものであるという評価を与えるのではなく、期待に対するプロセスや期待の認知に注目していくことによって、親子の関係性の中で期待の効果を適切に生かすことができる方法の模索が重要である（渡辺・新井, 2008）。同時に子どもが期待に対してどのような感情を抱き、行動をとるのかという反応様式に注目することは、親の期待が子どもに与える影響のメカニズムを明らかにすることに有効であると考えられる（春日ら, 2013）と述べられていることから、本研究では、子どもが親の期待を感じたときにする反応を、どのような期待を親から感じとったのかという「親の期待」と、期待を感じてどのような感情を抱き、行動したのかという「期待に対する反応様式」の二つの側面からとらえる。

春日・宇都宮・サトウ（2014）では、親の期待を以下の三つに分類している。

①進路期待：「よい高校・大学に行ってほ

しい」や「良い企業に就職してほしい」、「将来のために、しっかり勉強してほしい」など将来の進路に関する親の期待。

②人間性期待：「人に優しくしてほしい」や「正直でいてほしい」、「思いやりを持ってほしい」などの子どもの人間性に関する親の期待。

③よい子期待：「親の言うとおりにしてほしい」や「ほかの子と比較して優れてほしい」、「何に関しても一番になってほしい」などの親にとってよい子どもであってほしいという親の期待。

本研究においても、親の期待として上記の三つを想定し、失敗観との関連を検討していく。

また春日ら（2014）では、期待に対する反応様式を以下の三つに分類している。

① 肯定反応：「期待されて励みに思った」、「喜んで期待に応えた」など、期待されることを受け入れ、積極的に応えようとするといった、期待に対する肯定的な姿勢が特徴的な反応様式。

② 反発反応：「放っておいてほしいと思った」や「自分に口出ししないでほしいと思った」など、期待する親に対しての反発としての反応様式。

③ 負担反応：「期待を重荷だと感じた」、「気にせず、普通に生活した」や「期待に応えるために、無理をした」など、期待に応えることに負担感を感じ辛い思いをしたといった反応様式。

本稿においても、期待に対する反応様式として上記の三つを想定し、分析により失敗観との関連を検討していく。

2. 仮説

以上の背景をふまえ本研究では、失敗観の形成に親の期待及び期待に対する反応様式がどのように影響を与えているかを検討することを目的とする。

本研究では次の二つの仮説を想定する。第一の仮説は、親の期待のうち「進路期待」及び「よい子期待」を強く感じる者の方が、失敗観の「失敗に対

するネガティブ感情価」、「失敗の回避欲求」が強い、である。春日（2012）では人間性に関する期待が高いと期待に対する肯定的な反応を示し、進路に関する期待や「良い子であってほしい」という期待認知が高い場合は、期待に対する否定的な反応が強くなることが示されている。特に「進路期待」に関しては、親の期待が子どもの実力以上のものを求めてしまう過剰期待を引き起こしやすいと考えられることから、「進路期待」、「良い子期待」に子どもが応えようとするのは、高い理想像を子ども自身が求め、負担に感じてしまう。そして理想を叶えることを阻害する失敗経験を恐れ、回避しようとすると考えられることができる。よって、「進路期待」や「よい子期待」をより感じる者の方が「失敗に対するネガティブ感情価」及び「失敗の回避欲求」が強いのではないかと考えることができる。よってこの第一の仮説を想定した。

第二の仮説は、期待に対する反応様式のうち「負担反応」を強く感じる人の者の方が、失敗観の「失敗に対するネガティブ感情価」、「失敗の回避欲求」が強い、である。期待に対する反応様式の「負担反応」は、「結果を出せなかったらどうしよう」といった、期待に応えられないことを懸念する反応様式であると見ることができる。よって、「負担反応」を強く感じる者はネガティブな失敗観が高まるのではないかと考えることができる。よってこの第二の仮説を想定した。

本研究では大学生を調査対象とする。大学生の多くは、失敗することを必ずしも肯定的にとらえる環境に身を置けるとは限らない。その中で失敗に対して過剰にネガティブであると、自身の成功や成長を阻害するだけでなく、自尊感情の低下や特性不安を高めるといった精神的に不健康に繋がる可能性がある。大学生を調査対象とすることで、大学生の失敗に対する価値観の現状を知ることができるだろう。また本稿は、今後大学進学を考えている子を持つ親にとっても、将来子どもがうつ病などのメンタルヘルス不調を引き起こさないためにも、どのような関わり方が必要かを考える一助になるという意味で意義のある研究であると思われる。

さらに、本研究では大学生だけではなく、専門学校生も調査対象とする。専門学校生の持つ失敗

経験が大学生の持つそれと大きく違っている可能性を考慮したからである。大学生と専門学校生を比較することによって、より大学生の持つ特徴を明らかにできると考えられる。

以上をふまえてまとめると、本研究の仮説と概念図は以下ようになる。

仮説Ⅰ：親の期待のうち「進路期待」及び「よい子期待」を強く感じる者の方が、失敗観の「失敗に対するネガティブ感情価」「失敗の回避欲求」が高い。

仮説Ⅱ：期待に対する反応様式のうち「負担反応」を強く感じる者の方が、失敗観の「失敗に対するネガティブ感情価」、「失敗の回避欲求」が高い。

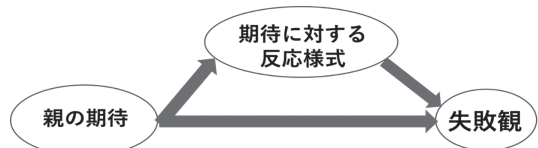


Figure 1 仮説モデル

3. 方法

調査対象は、沖縄県内の国立大学生144名（男性77名、女性67名； $M = 18.98, SD = 0.809$ ）、看護系専門学校生122名（男性20名、女性100名； $M = 21.28, SD = 4.156$ ）の計266名を対象とした。また、調査は2019年11月中旬から11月下旬にかけて、質問紙により実施した。

質問項目としては、①フェイスシート、②親との関係尺度、③親からの期待尺度、④期待に対して抱いた感情尺度、⑤期待に対してとった行動尺度、⑥失敗観尺度、⑦ローゼンバーグの自尊感情尺度の日本語版を用いた。

(1) フェイスシート

フェイスシートには調査の目的と、プライバシーを守り、得られたデータは統計的に処理することを明記した。また年齢、性別、学校名、学年、出身地、高校生の時に一緒に住んでいた人の記入を求めた。

(2) 親との関係尺度

大久保・青柳（2003）が作成した親との関係尺度（全5項目）を用いた。「1. 当てはまらない」

から「5. 当てはまる」の5件法で回答を求めた。

(3) 親からの期待尺度

春日・宇都宮（2011）が作成した親からの期待尺度（全32項目）を用いた。春日・宇都宮（2014）の研究において「進路期待」「人間性期待」「よい子期待」の三つの因子で構成されていることが示された。

本研究では、回答者の負担を考慮し、春日ら（2014）の研究においては、各因子の因子負荷量の高かった5項目を抽出した計15項目を用いた。「1. 当てはまらない」～「5. 当てはまる」の5件法で回答を求めた。

(4) 期待に対して抱いた感情尺度

春日・宇都宮（2011）が作成した期待に対して抱いた感情尺度（全13項目）を用いた。春日ら（2014）の研究において、「肯定反応」「反発反応」「負担反応」の3因子で構成されていることが示された。

本研究では、回答者の負担を考慮し、春日ら（2014）の研究において、因子負荷量の高かった項目をいくつか抽出して質問項目を作成した。項目数は、「肯定反応」からは5項目、「反発反応」からは4項目、「負担反応」からは4項目の計13項目になった。「1. 当てはまらない」～「5. 当てはまる」の5件法で回答を求めた。

(5) 期待に対してとった行動尺度

春日・宇都宮（2011）が作成した期待に対してとった行動尺度、（全9項目）を用いた。春日ら（2014）の研究において、「肯定反応」「反発反応」「負担反応」の3因子で構成されていることが示された。「1. 当てはまらない」～「5. 当てはまる」の5件法で回答を求めた。

(6) 失敗観尺度

池田・三沢（2012）が作成した失敗観尺度（全24項目）を用いた。池田ら（2012）の研究において、本尺度は「失敗に対するネガティブ感情価」、「失敗からの学習可能性」、「失敗の回避欲求」、「失敗の発生可能性」の4因子で構成されていることが示された。「1. 全くそう思わない」～「5. 非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

(7) ローゼンバーグの自尊感情尺度の日本語版尺度

桜井（2000）が作成したローゼンバーグの自尊感情尺度、（全10項目）を用いた。「1. いいえ」～「4. はい」の4件法で回答を求めた。

上述した項目からなる質問紙調査を、講義時間に集団一斉方式で実施した。回答はいずれも無記名で行った。

4. 結果

(1) 対象

調査は、沖縄県の国立大学144名、看護系専門学校生122名を対象に実施した。このうち、記入漏れや欠損値のあった者を分析対象者から除外した。

大学生・専門学校生の性別と出身地は以下の通りであった（Table 1）。

Table 1 大学生と専門学校生の性別・出身地

		専門学校	大学	合計	
性別	男性	度数	20	67	87
		性別の%	23.0	77.0	100
	女性	度数	100	77	177
		性別の%	56.5	43.5	100
合計	度数	120	144	264	
	性別の%	45.5	54.5	100	
出身地	沖縄県内	度数	111	94	205
		出身地の%	54.1	45.9	100
	沖縄県外	度数	3	45	48
		出身地の%	6.3	93.8	100
	合計	度数	114	139	253
		出身地の%	45.1	54.9	100

(2) 本研究で使用する尺度の因子分析結果

① 親との関係尺度

親との関係尺度全5項目を1因子構造と仮定し、最尤法・バリマックス回転による因子分析を行ったところ、単因子構造が確認された（Table 2）。

クロンバックの α 係数は.92とかなり高く信頼性が得られたと考えられる。

② 親からの期待尺度

親からの期待尺度全15項目を春日ら（2011）と同様に3因子を仮定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、先行研究同様、3つの因子が抽出された（Table 2）。第I因子は、“いい高校・大学に行ってほしい”などの項目の負荷量が高かったため、「進路期待」因子とした。第II因子は、“思いやりを持ってほしい”や“人

にやさしくして欲しい”などの項目の負荷量が高かったため、「人間性期待」因子とした。第Ⅲ因子は、“親の言うことを聞いてほしい”などの項目の負荷量が高かったため、「よい子期待」因子とした。

項目数は、「進路期待」因子が6項目、「人間性期待」因子が6項目、「よい子期待」因子が3項目の計15項目となった。クロンバックの α 係数はそれぞれ「進路期待」が.88、「人間性期待」が.79、「よい子期待」が.81であり、比較的高い信頼性が得られたと考える。

③ 期待に対する反応様式尺度の検討

春日ら(2011)にしたがい、期待に対して抱いた感情、行った行動を併せて「反応様式」とした。期待に対して抱いた感情尺度全13項目と期待に対して行った行動尺度全9項目を併せた計22項目に因子分析を行った。3因子を仮定し、主因子法・プロマックス回転を行ったところ先行研究同様3因子が抽出された(Table 3)。第Ⅰ因子は、“期待に応えられるよう、頑張ろうと思った”や“喜んで着たいに応えた”などの項目の負荷量が高かったため、「肯

Table 2 親との関係尺度の因子分析結果

No	項目内容	I	共通性
4	親は私の言うことを真剣に聞いてくれた	0.89	0.80
2	親は私の相談に乗ってくれた	0.86	0.74
1	困っているときには親は励ましてくれた	0.85	0.73
5	親は私の気持ちを分かってくれた	0.85	0.72
3	親は公平に接してくれた	0.74	0.55

因子寄与率 70.80

Table 3 親の期待尺度の因子分析結果

No	項目内容	I	II	III	共通性
		「進路期待」	「人間性期待」	「よい子期待」	
3	いい高校・大学に行ってほしい	0.98	-0.02	-0.23	0.71
13	いい企業に就職してほしい	0.79	-0.01	0.00	0.62
4	他人に誇れる肩書きであってほしい	0.72	0.00	0.06	0.58
2	安定した職業についてほしい	0.70	-0.06	-0.12	0.39
8	勉強ができる子であってほしい	0.63	0.06	0.25	0.66
12	賢くあってほしい	0.51	0.15	0.23	0.49
5	思いやりを持ってほしい	-0.01	0.80	0.06	0.63
11	人にやさしくしてほしい	0.04	0.77	0.06	0.61
6	よい人間関係を作ってほしい	0.06	0.72	0.12	0.54
15	自分の満足のいく生き方をしてほしい	0.02	0.60	-0.36	0.52
14	自分のやりたい仕事をしてほしい	-0.12	0.59	-0.25	0.47
1	正直でいてほしい	-0.01	0.53	0.19	0.30
9	親の言うことを聞いてほしい	-0.08	0.14	0.84	0.63
10	親の言うとおりにしてほしい	-0.03	-0.05	0.83	0.67
7	ほかの子と比較して優れてほしい	0.38	-0.04	0.45	0.57
因子間相関		1.00	2.00	3.00	
	1	—	0.10	0.64	
	2	—	—	-0.08	
	3	—	—	—	

注) 因子負荷量の絶対値が .45 以上を採用

定反応) 因子とした。第Ⅱ因子は、“結果を出せなかったらどうしようと不安だった”や“どうすべきかわからず、悩んでいた”などの項目の負荷量が高かったため、「負担反応」因子とした。第Ⅲ因子は“放っておいてほしいと思った”などの項目の負荷量が高かったため、「反発反応」因子とした。

項目数は「肯定反応」因子は9項目、「負担反応」因子は7項目、「反発反応」因子は4項目の計20項目となった。なお、二つの因子の因子負荷量に当てはまった1項目、十分な因子負荷量を示さなかった1項目の計2項目を分析から除外した。ク

ロンバックの α 係数は、「肯定反応」が.89、「負担反応」が.85、「反発反応」が.85であり、比較的高い信頼性が得られたと考える。

④ 失敗観尺度の検討

失敗観尺度全24項目を、池田ら(2012)と同様に4因子を仮定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、先行研究同様、四つの因子が抽出された。第Ⅰ因子は、“失敗すると、自己嫌悪に陥ってしまう”などの項目の負荷量が高かったため、「失敗のネガティブ感情価」とした。第Ⅱ因子は、“失敗とは成長するための最大のチャ

Table 4 期待に対する反応様式尺度の因子分析結果

No	項目内容	I	II	III	共通性
		「肯定反応」	「負担反応」	「反発反応」	
4q8	期待に応えられるよう、頑張ろうと思った	0.86	0.05	0.07	0.71
4q10	期待されることでやる気が出た	0.84	-0.06	-0.03	0.73
4q7	期待されて励みに思った	0.80	-0.07	-0.03	0.66
4q9	期待する親に感謝している	0.77	-0.02	-0.03	0.61
5q1	喜んで期待に応えた	0.73	-0.07	-0.03	0.55
5q9	期待に応えられるように頑張った	0.67	0.27	0.02	0.54
4q1	期待されることで背中を押されるように思った	0.63	0.08	-0.11	0.46
5q5	自分なりにできる努力をした	0.56	0.03	0.18	0.29
5q6	応えられるような期待には応えた	0.50	-0.13	0.19	0.21
4q5	結果を出せなかったらどうしようと不安だった	0.13	0.78	-0.01	0.63
5q4	どうすべきかわからず、悩んでいた	-0.11	0.71	-0.03	0.49
5q8	期待に応えられるように、無理をした	0.02	0.70	-0.01	0.48
4q4	期待されて辛かった	-0.19	0.69	0.15	0.65
4q2	期待を重荷だと感じた	-0.12	0.64	0.16	0.56
4q6	期待を裏切っただけだと思った	0.24	0.63	0.05	0.50
5q3	気にせず、普通に生活した	0.05	0.48	-0.25	0.19
4q12	放っておいてほしいと思った	0.11	-0.07	0.91	0.71
4q11	自分に口出ししないでほしいと思った	0.02	-0.07	0.83	0.64
4q13	そんなこと言われなくても分かっていると思った	0.11	-0.10	0.83	0.57
4q3	親に自分の何がわかるのかと思った	-0.05	0.27	0.55	0.55
5q2	期待に対して反発した	-0.12	0.31	0.31	0.33
5q7	期待している親と話し合った	0.33	0.37	-0.13	0.26
		1.00	2.00	3.00	
	1	—	0.04	-0.32	
	2	—	—	-0.08	
	3	—	—	0.51	

注) 因子負荷量の絶対値 .55 以上を採用

ンスだ”などの項目の負荷量が高かったため、「失敗からの学習可能性」因子とした。第Ⅲ因子は、“失敗とは、決して許されないことだ”、“失敗とは、決して起こしてはいけないことだ”などの項目の負荷量が高かったため、「失敗の回避欲求」因子とした。第Ⅳ因子“失敗は日常茶飯事だ”などの負荷量が高かったため、「失敗の発生可能性」因子とした。

項目数は、「失敗のネガティブ感情価」因子が6項目、「失敗の学習可能性」因子が6項目、「失敗の回避欲求」因子が6項目、「失敗の発生可能性」因子が6項目の計24項目となった。クロンバックの α 係数はそれぞれ「失敗のネガティブ感情価」が.88、「失敗の学習可能性」が.85、「失敗の回避欲求」が.82、失敗の発生可能性が.80であり、比

Table 5 期待に対する反応様式尺度の因子分析結果

No	項目内容	I	II	III	IV	共通性
		失敗のネガティブ感情価	失敗からの学習可能性	失敗の回避欲求	失敗の発生可能性	
19	失敗すると、自己嫌悪に陥ってしまう	0.89	-0.03	-0.06	-0.05	0.61
6	失敗すると、自身を失ってしまう	0.81	-0.06	-0.06	-0.02	0.52
5	失敗すると、私は悲しい気持ちになる	0.68	0.05	0.04	0.09	0.55
2	失敗すると、自分を否定してしまう	0.66	0.02	0.14	-0.09	0.55
22	失敗したことを、私は後々まで気にしてしまう	0.64	0.02	0.05	0.06	0.46
8	失敗すると、しばらくは立ち直れない	0.63	0.03	0.12	-0.03	0.49
11	失敗とは、成長するための最大のチャンスだ	-0.01	0.92	0.00	-0.04	0.82
12	失敗することで、成長が促される	0.02	0.78	0.02	-0.02	0.58
10	失敗することで、一皮むけることができる	-0.11	0.73	0.09	0.02	0.51
15	失敗を乗り越えることで、成長することができる	0.04	0.70	-0.13	0.04	0.60
3	失敗とは、前に進むための原動力になる	0.09	0.62	-0.12	-0.08	0.40
21	失敗は、基本に帰ることを思い出させてくれる	-0.02	0.52	0.10	0.16	0.32
9	失敗とは、決して許されないことだ	-0.01	-0.01	0.72	-0.01	0.52
20	失敗とは、決して起こしてはいけないことだ	-0.04	0.08	0.70	-0.14	0.46
1	失敗とは、あってはならないことだ	0.03	-0.01	0.69	-0.07	0.53
2	失敗とは、汚点である	0.07	-0.09	0.66	0.05	0.53
17	失敗とは、情けないことである	0.22	-0.05	0.63	0.03	0.63
13	失敗とは、周りから責められるものである	0.13	0.03	0.56	0.19	0.41
23	失敗は日常茶飯事だ	-0.14	0.03	0.20	0.75	0.53
16	失敗とは、よくあることだ	0.05	-0.07	-0.20	0.74	0.60
24	失敗とは、気をつけていても起こるものだ	-0.02	0.00	0.04	0.68	0.45
18	失敗とは、当たり前にしてしまうものだ	-0.14	-0.02	-0.02	0.60	0.35
14	失敗とは、避けられないものである	0.11	0.04	-0.01	0.55	0.35
7	失敗とは、頻繁に起こることだ	0.27	0.09	-0.14	0.44	0.33
因子間相関		1.00	2.00	3.00	4.00	
	1	—	-0.14	0.56	0.11	
	2	—	—	-0.42	0.39	
	3	—	—	—	-0.18	
	4	—	—	—	—	

注) 因子負荷量の絶対値 .45 以上を採用

Table 6 ローゼンバーグの自尊感情尺度の日本語版尺度の因子分析結果

No	項目内容	I	共通性
10	私は自分がだめな人間だと思う	0.74	0.55
5	私は自分に対して、前向きな態度をとっている	0.73	0.53
6	私は自分が役立たずだと感じる	0.72	0.52
4	私は自分に満足している	0.68	0.46
8	自分を失敗者だと思いがちである	0.64	0.41
1	私は自分に見どころがあると思う	0.64	0.41
7	私は、たいいていの人がやれる程度には物事ができる	0.63	0.39
9	私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う	0.63	0.39
3	私には得意に思うことがない	0.58	0.34
2	もう少し自分を尊敬できたらと思う	0.30	0.09

因子寄与率 41.00

較的高い信頼性が得られたと考えられる。

⑤ ローゼンバーグの自尊感情尺度の日本語版尺度の検討

ローゼンバーグの自尊感情尺度の日本語版尺度全10項目を桜井（2000）と同様に、1因子構造を仮定し、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行ったところ、先行研究と同様、1因子構造が確認された（Table 6）。

クロンバックの α 係数は.86であり、比較的高い信頼性が得られたと考える。

(3) 親の期待と失敗観が自尊感情に与える影響

以上の変数を用い、親から期待を受けることが失敗観にどのような影響を与え、最終的に自尊感情へどのようなインパクトを与えるのかを検討するため、パス解析を行う。

なお、当初は大学生と専門学校生の間にはさまざまな差があると想定していたが、結果は省略するが二者間の差を検討したところ、有意な差がほとんど見られなかったため、以降の分析では特に区別せずに分析を進めていくことにする。

自尊感情を従属変数にし、親との関係、親の期待（進路期待・人間性期待・よい子期待）、期待に対する反応様式（肯定反応・負担反応・反発反応）、失敗観（失敗のネガティブ感情価・失敗の学習可能性・失敗の回避欲求・失敗の発生可能性）、年齢、ダミー変数として性別（男性＝1、女性＝0）、出身地（沖縄県内出身者＝1、沖縄県外出身者＝0）、学校（大学生＝1、専門学校生＝0）を従属変数として、ステップワイズ法により重回帰分析を行った。その結果、有意な影響を与えて

いる変数を取捨選択し、改めて重回帰分析を行い、パス・バイアグラムを作成した。

① 失敗の回避欲求が自尊感情に与える影響

従属変数として自尊感情を設定し、親の期待のうち「よい子期待」、反応様式のうち「負担反応」、失敗観のうち「失敗の回避欲求」、年齢、性別（男性）を独立変数として分析を行った。

分析の結果、「よい子期待」と「負担反応」が失敗観の「失敗の回避欲求」に正の影響を与えている（ $\beta = .176, p < .05$ ）、（ $\beta = .233, p < .01$ ）ことが示された。自尊感情への影響に関しては、「負担反応」と「失敗の回避欲求」が自尊感情へ負の影響を与えている（ $\beta = -.168, p < .05$ ）、（ $\beta = -.420, p < .01$ ）ことが示された（Figure 2）。

② 失敗のネガティブ感情価が自尊感情に与える影響

次に自尊感情を従属変数として設定し、親の期待のうち「人間性期待」、反応様式のうち「負担反応」、失敗観のうち「失敗に対するネガティブ感情価」、年齢、性別（男性）を独立変数として分析を行った。

分析の結果、「人間性期待」が「失敗のネガティブ感情価」に負の影響を与え（ $\beta = -.167, p < .01$ ）、「負担反応」が「失敗のネガティブ感情価」に正の影響を与えている（ $\beta = .364, p < .01$ ）ことが示された。自尊感情への影響に関しては、「人間性期待」が自尊感情に正の影響を与え（ $\beta = .201, p < .01$ ）、「失敗に対するネガティブ感情価」が自尊感情へ負の影響を与えている（ $\beta = -.528, p < .01$ ）ことが示された（Figure 3）。

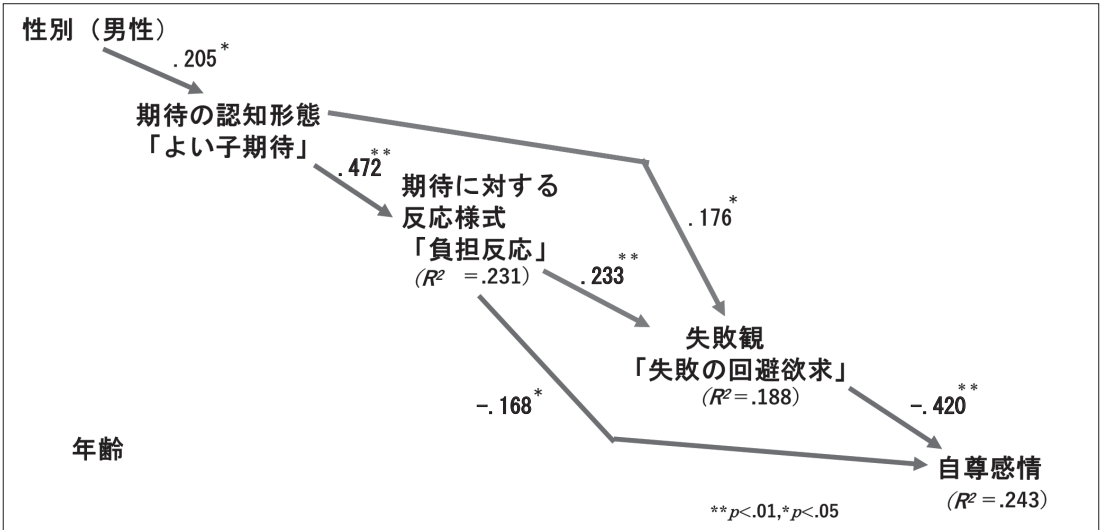


Figure 2 パス・ダイアグラム 1

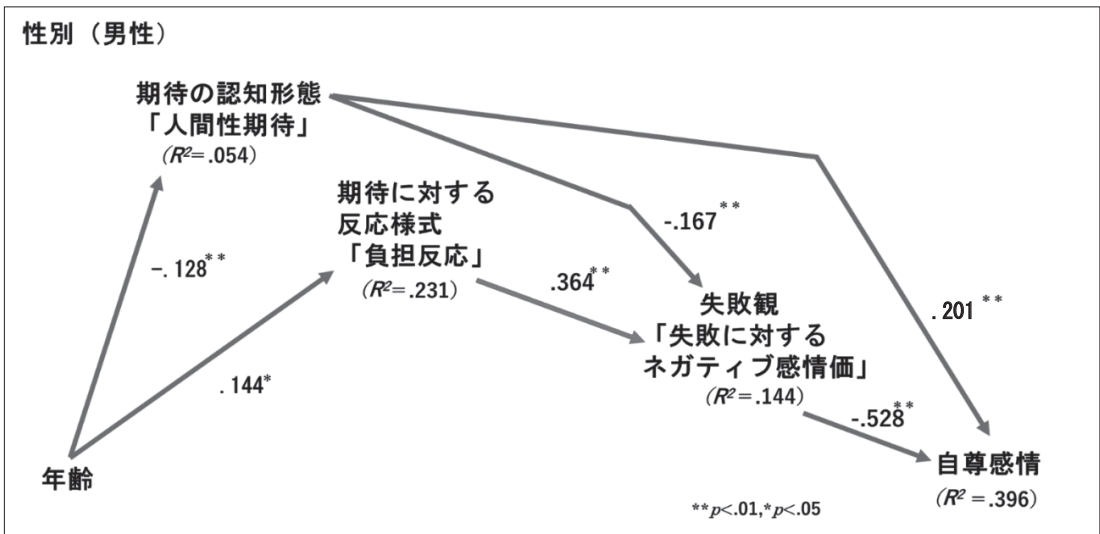


Figure 3 パス・ダイアグラム 2

5. 考察

本研究の目的は、親から向けられた期待を子どもがどのように感じとるかによって、子どもの失敗に対する価値観である失敗観にどのように影響を与えるかを明らかにし、大学生の支援に役立つことであった。

パス解析を行ったところ、親の期待の「よい子期待」と反応様式が失敗観の「失敗の回避欲求」を高めること、そして「負担反応」と「失敗の回避欲求」が自尊心を低めることが示された。ま

た、「負担反応」は「失敗のネガティブ感情価」も高めること、「失敗のネガティブ感情価」は自尊心を低めるという結果も得られた。以上の結果は、本研究の仮説Ⅰを一部支持し、仮説Ⅱを支持していると言える。このような自尊心へのマイナスの影響が見られた一方で、「人間性期待」に関しては「失敗のネガティブ感情価」を低め、自尊心は高めるとことが示された。

これらのことから、親から「よい子期待」(「親の言うとおりにしてほしい」といった親にとってよ

い子どもでもあってほしいという親の期待)を受けると子どもは「負担反応」(「親の期待を重荷だと感じた」など、親の期待に応えることに負担感を感じ辛い思いをしたといった反応様式)を示し、ネガティブな失敗観を強める。そして強まったネガティブな失敗観は自尊感情を低めてしまう。このことから、親の過剰な期待が将来、その子どもをうつ状態にしてしまう危険を孕んでいると言える。

その一方で親から「人間性期待」(「人に優しくしてほしい」や「正直でいてほしい」、「思いやりを持ってほしい」といった子どもの人間性に関する親の期待)を受けると、失敗に対するネガティブな印象が薄れ、結果的に自尊感情が高まるといえることが考えられる。親からそうした期待をかけられて子どもは、いわば耐性を持つことができると推察される。

以上を応用すれば、将来的には、大学生がネガティブな失敗観から脱するための支援に役立つことができるだろう。

おわりに

本研究とその結果は、メンタルヘルスの視点での学生支援のみならず、高等教育において重要性が指摘されるキャリア支援の現場においても、重要な示唆を与えるものと思われる。

将来の自身の可能性に対してポジティブな考えを持ち、その可能性を拡げていくようなキャリア意識を発達させるためには、キャリアに関わる行動を積極的に起こしていくことが重要だとされる。キャリア支援に学習理論からアプローチするクランボルツ(John D. Krumboltz)が指摘するように、産業構造が変化し、変化と多様性に富んだ進路や職業生活が想定される現代社会においては、自分のキャリアに関わる信念や価値観を揺さぶり、興味や能力を拡げていく行動をとることによって学習を促進させていく必要がある(大庭,2018)。ネガティブな失敗観はこうした行動をとる勇気を阻害するものとはいえ、本研究で着目した親の期待とそれに対する反応様式については、キャリア支援の現場においても念頭に置いていくことが効果的だろう。

また、本研究は沖縄県内の大学生と専門学校生を対象としたが、地方在住の学生のキャリア発達

については、親の期待を過度に自分のキャリア観に結び付けている可能性が指摘されている(杉山,2012)。特に、心理的に親からの自立が不十分な学生は、親の期待も受けて地元志向を強めやすい傾向がある(米原ら,2015)。こうした地元志向の地方在住学生は、無意識に進路の選択の幅を狭めるなど、都市圏の学生に比べキャリア意識が低いことが指摘されている(労働政策研究・研修機構,2015;平尾ら,2006)。これらのことから、自県からの進学者が多い沖縄県においては特に、親の期待と反応様式による行動へのネガティブな失敗観が、学生のキャリア意識に影響を与えている可能性を指摘できるだろう。

ネガティブな失敗観を払拭することは、学生生活でのメンタルヘルス不調の防止につながるだけではなく、卒業後の幅広い進路選択を考えるキャリア意識の発達をも促す可能性がある。本研究とその結果は、今後、特に沖縄県における学生のキャリア支援への応用も期待されるものである。

<参考文献>

- 安達悠子・中山諒 2017,「失敗観とセルフハンディキャップとの関連—フィールドホッケー部員を対象に—」『東海学院大学研究年報』2, 123-130.
- 平尾元彦・重松政徳 2006,「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』3, 161-168.
- 池田浩・三沢良 2012,「失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発—」『教育心理学研究』60(4), 367-379.
- 池田幸恭 2009,「大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係」『青年心理学研究』21, 1-16.
- 次田彰 2002,「失敗知識活用研究会の活動および失敗知識データベースの構築について」『安全工学』41(3), 142-147.
- 春日秀朗・宇都宮博 2011,「親からの期待認知が大学生の自尊感情に与える影響—子どもの期待に対する反応様式に注目して—」『立命館人間科学研究』22, 45-55.
- 春日秀朗・宇都宮博・サイトウ タツヤ 2013,「親の期待に対する反応様式の発達的变化—大学生の改装データから」『立命館人間科学研究』

- 28, 127-136.
- 春日秀朗・宇都宮博・サイトウ タツヤ 2014, 「親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響：期待に対する反応様式に注目して」『発達心理学研究』25(2), 121-132.
- 柏木恵子 1974, 「青年期における性役割の認知」『教育心理学研究』22, 205-215.
- 柏木恵子1990, 「環境としての親の期待」『発達』11(41), 9-17.
- 河村照美 2003, 「親からの期待と青年の完全主義傾向との関連」『九州大学心理学研究』4, 101-110.
- 松本恒之・渡辺恵美子 1983, 「親からの期待に関する縦断的研究」『東洋大学児童相談研究』2, 35-51.
- 三沢良・池田浩・西元久雄・阿部真理 2006, 「失敗に関する価値観についての検討」『日本心理学会第70回大発表論文集』99.
- 三宅典恵・岡本百合 2015, 「大学生のメンタルヘルス（＜特集＞現代の若者のメンタルヘルス）」『心身医学』55(12), 1,360-1,366.
- 仲野好重・桜本和也 2006, 「親子関係における期待と青年期における期待について」『大手前大学社会文化学部論集』6, 111-126.
- 西村多久磨・瀬尾美紀子・植阪友理・マナロ エマニュエル・田中瑛津子・市川伸一 2017, 「学業場面に対する失敗観尺度の作成」『教育心理学研究』65(2), 197-210.
- 市川伸一 2017, 「学業場面に対する失敗観尺度の作成」『教育心理学研究』65(2), 197-210.
- 尾木直樹 1990, 「親の過剰期待と空転する子どもの努力」『児童心理』50, 75-80.
- 大庭さよ 2018, 「ジョン・クランボルツ 学習理論からのアプローチ」渡辺三枝子(編著)『新版 キャリアの心理学 キャリア支援への発達のアプローチ』, 129-148
- 大久保智生・青柳肇 2003, 「中学生の問題行動と学校及び家庭環境への適応感との関連」『日本福祉教育専門学校紀要』11, 11-19.
- 労働政策研究・研修機構 2015, 「若者の地域移動—長期的動向とマッチングの変化—」
- 桜井茂雄 2000, 「ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討」『筑波大学発達臨床心理学研究』12, 65-71.
- 桜井茂雄・大谷佳子 1994, 「完全主義と抑うつ傾向の関係についての研究—Burnsによる完全主義尺度を用いて—」『奈良教育大学教育研究所紀要』43, 213-233.
- 孫逸舒 2010, 「両親の過度の期待と青年の抑うつ傾向の関連—日本と中国における比較研究」『人間文化創成科学論叢』13, 237-245.
- 佐々木正宏 1995, 「人間関係の発達理論」澤田瑞也(編)『人間関係の発達心理学：1 人間関係の生涯発達』培風館.
- 杉山成 2012, 「大学生における地元志向意識とキャリア発達」『小樽商科大学人文研究』123, 123-140.
- 高木秀明・馬場健彦・徳永真理 1997, 「大学生の価値観形成における他者の影響—大学生の主観的評価を通して—」『日本教育心理学総会発表論文集』39,122.
- 寺尾敦・市川伸一・楠見孝 1998, 「数学学習における誤りからの「教訓帰納」の自発的な利用を促す事例研究から」『教育心理学研究』58, 80-94.
- 植阪友理 2010, 「学習方略は学習館でいかに転移するか—教訓機能の自発的な利用を促す事例研究から—」『教育心理学研究』58, 80-94.
- 渡辺雪子・新井邦二郎 2008, 「親の期待研究の動向と展望」『筑波大学心理学研究』36, 75-83.
- 米原拓矢・田中大介 2015, 「地元志向と心理的特性との関連: 新たな発達モデルの構築に向けて」『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』11(3), 139-157.